



# 世界に挑む人材を

国際協力銀行代表取締役総裁

## 奥田 碩

Hiroshi Okuda



おくだ・ひろし  
1932年三重県生まれ。1955年一橋大学商学部卒業後、トヨタ自動車販売(現トヨタ自動車)入社。トヨタ自動車取締役、常務取締役、専務取締役、代表取締役副社長を経て、1995年に代表取締役社長に就任。その後同社代表取締役会長、取締役相談役、相談役。2002年5月から2006年5月まで一般社団法人日本経済団体連合会会長。2012年4月より現職。

急激なボーダーレス化が日々進んでいる。アフリカや中南米を訪れても実感するのは、先進国に限らず途上国でも、国境を跨いで人、モノ、金、情報が猛スピードで行き交っているという

ことだ。こうしたボーダーレス化の急激な進展は、経済のグローバル化やインターネットに代表されるIT技術の発達等によって刺激された側面もあるが、これはもはや一過性の事象ではな

に意識し過ぎていて。世界の変化に対して日本の変化が遅いのは、こうした日本人の資質によることも大きいだろうが、リーマンショックや東日本大震災という大きな危機を経て、いよいよこれまでの手法での成長の限界に突

き当たり、日本経済活性化のために今までとは違うやり方も必要だということがようやく認識され始めた。

外国人からは「日本はなかなか動かないが、走り出せば速い」という声を聞くこともある。だが、実際には「走りながら考える」方が速いだろう。世界がこれだけ日々激変している状況では「変わるリスク」よりも「変わらないリスク」の方が大きいのである。走りながら考え、走りながら経験を積む者だけに見える世界というものもあるだろう。

私自身の経験からも、変革を求めることで、次の成長の道筋が見えてきたという思いもある。社会人になった直後から、社内のルールでもおかしかったことは何でも指摘してきた。そのため上司から疎まれることもあったが、新たな問題意識が芽生えた。これは経営でも同じで、同じことばかり

やっていると沈んでしまう。企業にも、絶頂期もあれば下降期もあり、経営者としては好調期をできるだけ維持することが重要となる。好調を維持するには、「変化」を恐れないチャレンジ精神が必要なのだと考える。

これから日本が世界に伍していくために最も大きな課題は、「変化に挑む人材の育成」だろう。皆が同じ意識で同じことをやるというのは、これまでの日本人や日本企業の強みだったが、これは今や「弱点」ともなっている。この全体意識が、やれるのにやらず、ブレイクスルーを目指さないという消極さにもつながっている。この点、華僑とは対照的で、華僑は世界中どこにでも出て行き、存在感を強めている。日本人の場合、海外で生活し、海外で骨をうずめ、その国の土にまでなろうと考えている人は多くはないだろう。かつて日本人は、今より語学力は乏し

かったが、海外に出て行かなければいけないという危機感があって、外国に進出していった。そして今は、日本自体が豊かになり、そのような切迫感、危機感が薄れている。

今や日本経済は世界経済の大きなうねりに自動的に組み込まれ、そして今後もボーダーレス化の波は止まらないだろう。ボーダーレス化された時代では、多種多様な考えの人が世界中どこにでもいることになる。日本人は、言語能力の低さが外国人と接する際の大きな障壁となっているが、これからは世界中で意思の疎通を図れる資質を備えていなければならない。どこにでも住める「世界人」だという意識を持つことが重要であり、そのためにはランゲージバリアをなくすだけでなく、世界中を生活の場とできる人格や教養を磨くことが急務なのではないだろうか。